

# さわやかトカラ情報

南北160km  
「心をつなぎ

気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会  
〒892-0822鹿児島市泉町13番13号  
TEL 099-227-9771

## 【新生〇〇学園！義務教育学校がスタート】

十島村教育長 木戸 浩

令和6年度がスタートして2か月が過ぎようとしています。今までの小中学校が幕を下ろし、新しい義務教育学校が開校しました。名前は代わったけど、学園になって中身はどう変わったの？という疑問を持たれている方も多いと思います。一朝一夕には「こうなりました」という結果はなかなか出せませんが、小学校と中学校という垣根が無くなり、いわゆる「中一ギャップ」と言われる不登校や学校への行き渋りはなくなっています。また、先生方の人数が増えたことで、より専門的な先生から教えてもらえるので、学習の理解度も上がります。小学校高学年の教科を中学校の免許を持っている先生が、乗り入れ授業で複式授業を解消してより専門的に教えていただけるので、より学力が定着していきます。また、先生方の臨時免許も少なくなり、授業時数等も減るので、先生方の「働き方改革」にもつながっています。

「総合的な学習の時間」を、「トカラ科」という呼び方でそれぞれの島の独特な文化や特性（自然や動植物等）を、学年の発達段階に応じて調べたりまとめたり、発信したりします。それによって、それぞれの島を詳しく知り、愛着をもって、郷土に誇りをもつことができるようになります。

ぜひこれからの学校の取組を温かく見守り、励ましの声をかけていただければと思います。

## 1 先人の教育論・教師論に学ぶ

私たちは人生の営みのさまざまな時期に、予期せぬ壁に当たったり、自分の進むべき道に暗雲が立ちこめたりすることがあります。

この事案・業務に対する姿勢はこれでよいか、子どもを観る目に曇りはないか、見方に偏りがなく、対応にぶれが生じていないか、経験を重ねてきたがゆえの傲りや緩みはないかなど。そんな時こそ、しばし立ち止まってみることも良いかもしれません。

ある人は、折々に「原点に戻る」「初心に戻る」ことを大事にされているようです。またある人は、「先人（先輩）に学ぶ」「古典を紐解く」ことで、道に僅かでも光を照らそうとされています。先人の教えを一つ。

## ○『学政惑問』 ～辛島塩井（からしま えんせい）～

1755-1839年、江戸時代中～後期の儒者です。家は代々肥後熊本藩儒。草野潜溪に学び、天明6年、藩校「時習館」の訓導。寛政4年江戸に出て藩主の侍講を務めた人です。享和2年、幕府の命令により昌平黌（しょうへいこう）で講義を行いました。文政4年、「時習館」の教授となり、天保10年2月23日死去。86歳。名は知雄。字（あざな）は伯彝。著作に『学政或問』『読周官経説』があります。氏の記した『学政惑問』の一節です。

人材というものは、急速にできあがるというものではない。管子の言葉にも、「一年を目安とする計画は、穀物を植えるのが一番よい。十年を目安とする計画は、木を植えるのが一番よい。百年を目安とする計画は、徳のある人を育てるのが一番よい。」というものであって、人が常食とするお米などの五穀や野菜などは、一年でできあがるものであるが、樹木は十年ぐらいかけて植れば、用が立つものとはならない。もっとも、樹木も大工の棟梁が（建物の）材料とするものは、十年、二十年くらいで育つものではない。ましてや、才能を開かせ、人として徳を身に付けることを、そう簡単にできるなどと考えることは、とんでもないことである。だから、人材を急ぎ立てて完成させようと思ふことは、一年くらいで育つ菜っ葉や大根を育てるのと同様に心得ているというものである。道理が分かっていないこと、こと以外にはない。

教育の方法は、とにかく急ぎ立てて行うことなく、寛大にして、ゆるやかにしているうちに、知らず知らずのうちに育てていくものである。

春の陽のぬくもりがあるように、教育のぬくもりによって、蒸し熱していれば、五年、十年の間には、盛んに、また勢いよく（人材が）わき起こる勢いが生じるはずである。これも、とにかく、ゆったりやらなかったりということがないように行うことが大切である。

九年間の最上級生 諏訪之瀬島学園後期課程九年 吉田 潤

マルバツキの花がピンクの花を咲かせる季節になりました。新たな先生や山海留学生、新一年生も加わり、新年度がスタートしました。諏訪之瀬島には島ならではの行事があります。タケノコ採りや海での水泳学習。タケノコは香りもよく、水泳ではカラフルな魚と一緒に泳げます。自力満点です。水泳ではカラフルな魚と一緒に泳げます。出来たての給食も魅力的だ。特に、週一回のパンは本校で温かくてフワフワしておいしい。諏訪之瀬島は、今年度も温かくてフワフワしておいしい。諏訪之瀬島は、今年度も温かくてフワフワしておいしい。諏訪之瀬島は、今年度も温かくてフワフワしておいしい。

幸せを次の人へ 小宝島中学校三年 浜崎 花和

私は昨年四月、山海留学生として、十島村の小宝島に転校してきました。最初は話せなかつたけれど、島民の方や先生方、学校のみなさんが優しく接してくれたおかげで、私も話せるようになりました。皆さんには心から感謝しています。その中でも、一年間、皆さんには心から感謝しています。その中でも、一年間、皆さんには心から感謝しています。その中でも、一年間、皆さんには心から感謝しています。

今年も吉田町の田知行様からカーネーションの寄贈がありました。（今年で43回目です。）



【宝島】 【平島】 【小宝島】

## 【第二の故郷】 悪石島学園後期課程9年 熊江 律

福岡市ど真ん中から悪石島へやって来て三年目になった。悪石島に来たばかりの中学一年生の頃を思い返してみると、自分でもずいぶん変わったなあとと思うことがある。それはコミュニケーション力だ。自ら他人と全くコミュニケーションを取ろうとしなかった僕が、今では島民の方々に話しかけるのが楽しみになっている。そう思えるようになったのは、やはり、気さくに話しかけてくれる島民の方のおかげだろう。あれほど人とコミュニケーションを取ろうとしなかった僕が、今では自分から積極的に話しかけることができるようになった。さらに、島の学校生活には少人数だからこそその良さがあると感じる。それは、輝く一人一人の個性だ。島の大運動会は、子供たちだけではなく、島民も参加して行われる。中でも一番盛り上がるのは応援合戦だ。その花形である応援団長を、今年僕はやることになるだろう。いや、むしろ立候補するつもりだ。福岡市内の学校ではなかなか経験できないこの大役を経験できるのも、ごく少人数のこの島ならではの良さであり、自分の個性を輝かせ、自信をもたせてくれた島民の方や先生方のおかげだ。豊かな自然、貴重な文化、そして笑いがあふれるこの島は、僕にとってかけがえのない第二の故郷になった。だから僕は決心した。十五で島立ちしても、必ずいつか悪石島に戻ってこよう。そして、悪石島で働こうと。

## 【平島学園からのメッセージ】 教頭 立石 徹

令和4年3月、前任校の校長先生に「次の赴任は教頭で鹿児島郡十島村の平島です」と言われことを今でも時々思い出します。初めての管理職、そして離島で単身赴任と、いろいろな不安がありました。平島に赴任して3年目になりましたが、あの時の不安は今全くありません。平島に来て、人の温かさや優しさ、美しさ全てが私の不安を取り除いてくれました。また、十島村では、教頭も授業をします。授業の中でも、子どもたちの素直さ、学びに向かう姿勢を見ることができ、「離島には教育の原点がある」という事を改めて感じます。私はこの2年間、島民の方とのつながりを大事にしてきました。毎回の通船作業は島民の方とのコミュニケーションをとる大事な場となっています。島の昔の事や釣りの事など私にとって貴重な話を聞ける場となっているので、通船作業は私の楽しみにもなっています。また、昨年は島の行事もコロナ禍前のように行われ、宮鶴女やカセグウチ等、平島ならではの行事に参加させてもらい、平島の事を学ばせてもらっています。そして、週末の釣りは私の楽しみの一つです。今では、島暮らしを満喫しています。この魅力あふれる平島で働けることに感謝し、児童生徒・保護者・島民の方、そして職員と力を合わせ、これからも平島ライフを満喫したいと思っています。

## 『教職員仲間であるあなた』への 私からのメッセージ

今年も村教研の事務局をさせていただきます。先生方にとって良い学びの場となるように準備していきたいと思っています。村教研で先生方とお会いできることを楽しみにしています。十島の教育について一緒に学びましょう。